

埼大生に読んでほしい 教養図書



埼大生に読んでほしい教養図書の公表にあたって 理事(教学・学生担当)・副学長 重原 孝臣

教養とは何でしょうか？ 一人の人間を山にたとえるならば、山裾に当たるものが、その人のもつ教養に当たると言えるでしょう。高い山を築こうと思えば、高みを目指すだけではなく、確固たる山裾、土台をバランスよく築くことが大切です。古今東西の多くの人々が富士山に魅了され続けてきたのは、その高みだけではなく、山裾を含めて、全体として調和のとれた姿があったからだと思います。時流の変化が激しい現代社会においては、ハウツー的な知識や技術はすぐに陳腐化します。それは高みを支える確固たる土台にはなりません。遠回りのように思うかもしれませんが、高みを目指す皆さんには、より基本的、より根源的な、時代や環境の変化にも耐ええる教養を身につけていただきたいと思います。ここでご紹介する本は、本学の教員が、所属学部や専門分野の違いを超えて、これだけは全ての埼大生に読んでいただきたいという思いから精選したものばかりです。それぞれの本には推薦者の寸評が付されています。参考にしていただき、目に留まったところから結構ですから、手にとってみてください。皆さんの人間としての土台作りに少しでも役立ててもらえれば、というのが私たち教員一同の思いです。

人文学



『「生きる意味」を求めて』

V・E・フランクフル著 上嶋洋一、松岡世利子訳 (春秋社)1999年

「生きる意味なんてない」とつぶやねて生きていけるほど私たちは強くはありません。物質的には比較的不自由なく生きられるようになった日本社会に生きる私たちだからこそ(経済的に苦しいと言っても、飢餓で人が死ぬことはほとんどなくなりました)、第二次大戦中に強制収容所を経験したユダヤ人である著者の極限状態から、単に物質では解決できない、生きる意味を学び取ることができるでしょう。

(基盤教育研究センター・准教授 加藤 有希子)



『イメージ:視覚とメディア』(ちくま学芸文庫)

ジョン・バージャー著 伊藤俊治訳 (筑摩書房)2013年

私たちはふだん何気なく外界を「見て」いますが、その「見る」ということの意味を改めて問い直す良著です。芸術や広告などの基礎になる「見る」ということには、民族や性別の力関係や、経済的・政治的利益の追求などの思惑が凝縮しています。たとえばなぜ女性は化粧をするのでしょうか。ふだん無意識にしている「見る」「見られる」の姿勢を分析、理解することで、女性を含め、さまざまな立場の人が束縛から自由になります。

(基盤教育研究センター・准教授 加藤 有希子)



『グローバル化と世界史』 (シリーズ・グローバルヒストリー 1)

羽田正著 (東京大学出版会)2018年

“グローバル化”という言葉はよく聞くけれど、歴史学というのは過去を研究するのだから、今のトレンドでどうこうなるものではない、と思う人もいるかも知れません。しかし、私たちが学んでいる歴史というものは、“ある特定の国家や時代”という状況設定の中で生まれた歴史にすぎないのではないのでしょうか。とすると、グローバル化が進むとされるこの世界で、私たちは歴史学の学びの転換点に立っているのかも知れません。そんなことを考えさせてくれる一冊です。(教育学部・教授 小林 聡)



『21世紀の文化人類学:世界の新しい捉え方』 (ワードマップ)

前川啓治ほか著 (新曜社)2018年

文化人類学は、世界の様々な地域に住む人々の文化や社会について研究する学問ですが、その扱う領域は、宗教や信仰から社会構造、政治過程、さらには芸能や福祉まで、非常に幅が広く、また対象とする地域も世界各地なので、その範囲の広さから、今までなかなかいい日本語の教科書は作られてきませんでした。それでもここ10年、ようやく少しずついい教科書が作られるようになってきました。本書は、そうした教科書のうち、最近の諸成果を取り入れてやや高度な理論的内容を論じた教科書で、入門を終えた学生がより深く学ぶのに適しています。

(人文社会科学部・教授 三浦 敦)



『ものの言いかた西東』(岩波新書)

小林隆、澤村美幸著 (岩波書店)2014年

無口かおしゃべりか、挨拶や喧嘩で決まった言い方をするかどうか……個性と思われがちな「ものの言い方」にも実は地域差が絡んでいます。本書は「ものの言い方」に関する志向や好み(言語的発想法)を7つに分類し、その地理的傾向を分析するだけでなく、そうした差異を生み出した社会環境の在り方にも目配りしています。地域に固有の文化について考えるうえで、有効な視点を提示してくれる一冊です。

(教育学部・准教授 池上 尚)



『物語は人生を救うのか』(ちくまプリマー新書)

千野帽子著 (筑摩書房)2019年

たとえば生きていく意味を考えると、人は(時に格言の、時に文学の姿をとって現れる)既存のストーリー形式に頼りながら、自分なりのライフストーリーを作りがちです。それは安定をもたらす一方で、「分かったつもり」や「型にとらわれる苦しみ」の源にもなります。本書は「物語る存在としての人間」を、物語論、心理学、哲学などさまざまな視点から照らし出し、毒にも薬にもなる「ストーリー」と少し距離を取りながら付き合っていく方法を教えてくれます。

(基盤教育研究センター・准教授 七田 麻美子)

哲学・芸術学

地理・歴史

言語・文学

社会科学

政治学・法学



『政治学講義』第2版

佐々木毅著 (東京大学出版会)2012年

初学者にはややむずかしいかもしれませんが、折々に読み返してもらいたい1冊です。著者は、まず「概念」が現実を読み解く上でどう意義を指摘した上で、政治をめぐる基礎概念について説明します。次に、現代民主政治の条件・制度・主体等について述べ、さらに、政治経済体制をめぐる最近の政治潮流について論じます。教科書的な体裁の背後に、多元的主体がいかにして公共の利益を生みだし得るのかという強烈な問題意識が感じられます。(人文社会科学研究科・准教授 土川 信男)



『現代法学入門』第4版(有斐閣双書)

伊藤正己、加藤一郎編 (有斐閣)2005年

本書は、法学が抽象的な原理を持つ無味乾燥な学問と理解されることのないように、法を社会統制の1つとして、生きた社会の関連の中で捉えようと努力しています。編者も述べるように、そのために、①法を具体的な問題に即して重点的把握ができるように、②法学を他の社会科学と関連させて理解できるように、そして③執筆者の個性的な考え方をある程度までに出して、読者の考える材料を提供するように努めており、法学を学びたいという気持ちを起こさせる入門書だと思います。(人文社会科学研究科・准教授 江口 幸治)

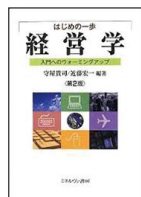
経済・経営



『君たちはどう生きるか』(岩波文庫)

吉野源三郎著 (岩波書店)1982年

経済を中心に人間と社会の関係を発見していく少年の物語です。子供向けの平易な書き方ですが、客観性とは何か、歴史における個人とは何かなど、社会科学に共通する奥の深い普遍的問題を扱っています。1937年に刊行された古い本ですが、最近またブームになりました。いくつかの版がありますが、岩波文庫版に収録されている丸山真男による著者追悼文もあわせて読むことをおすすめします。(人文社会科学研究科・教授 柳澤 哲哉)



『はじめの一步経営学

：入門へのウォーミングアップ』第2版

守屋貴司、近藤宏一編著 (ミネルヴァ書房)2012年

経営学は企業や組織の実践と深く結びついています。単にその実践に「役立つ道具」と考えるのは早計です。企業は経済活動を通じて多様な商品を提供しますが、同時に社会や自然に負荷をかけていることも否定できません(環境問題、企業不祥事、タックス・ヘイブンetc.)。本書は、広い視野から考えさせてくれる一助になるでしょう。(人文社会科学研究科・准教授 金房 広幸)

社会学



『はじめて学ぶ社会学』第2版

高木聖、村田雅之、大島武共著 (慶應義塾大学出版会)2016年

遊び・うわさ・自殺・流行・学校・結婚など、人々にとって身近なテーマから社会学的思考の基礎を解説している、入門的な教科書です。導入部に続く各章では、集団・会社・産業社会・高齢社会・メディア・情報など、現代社会の把握に欠かせないテーマを、社会学的概念を用いて考察しています。易しい文体で書かれており、また漫画を題材にした説明や、キーワード解説などの項目も多いので、社会学を初めて学ぶ方に適した教科書です。(人文社会科学研究科・准教授 佐藤 雅浩)



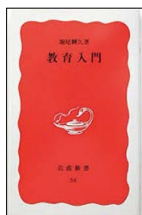
『LGBTを讀みとく:クィア・スタディーズ入門』

(ちくま新書)

森山至貴著 (筑摩書房)2017年

近年認知度が高まってきた「LGBT」を切り口に、単なる用語の解説ではなく、「LGBT」をめぐる社会の問題を讀みとくための一冊。社会学の中でも、ジェンダーおよびセクシュアリティという視点は重要です。ジェンダーおよびセクシュアリティをめぐる社会構造を解き明かし、そこに張り巡らされている「権力」を問い、多様性の中にいる私という「主体」と「社会」との関係について思考を広げてくれる「クィア・スタディーズ」の刺激を味わってください。(基盤教育研究センター・准教授 渡辺 大輔)

教育学・心理学



『教育入門』(岩波新書)

堀尾輝久著 (岩波新書)1989年

本書は、「権利としての教育」のあり方を追究する1冊です。教育の本質と学校の固有の任務に迫りながら、現代的な教育の課題をみる社会科学的視点を提供しています。「学校を問うことは、現代社会と現代文明を問うことでもある」と述べられているように、その視点は、教育のみならず現代社会の課題を見極めることにつながるものです。学ぶということは、「自分の世界が広がり豊かになり、人と人とのつながりが深められていく」ことなのです。(教育学部・教授 田代 美江子)



『学校と子ども理解の心理学』

清水由紀編著 (金子書房)2010年

本書は、本学教育学部の特別支援教育講座と教育心理カウンセリング講座(現心理・教育実践学講座心理学系)所属教員が総出で作った一冊です。前半は子どもの発達過程と障害について、また後半は学校内外での子どもと教師の関係に焦点を当てています。コラムでは事例が紹介されます。子どもに接する人ならたぶん抱くであろう問いがちりばめられており、それをたどりながら学校と子ども理解がいつそう進むようにという教員一同の願いが本書の基調です。(教育学部・教授 馬場 久志)

技術・工学

自然科学



『大学数学の基礎』(数学のかんどころ4)

酒井文雄著 (共立出版)2011年

高校までの数学は計算が中心、大学の数学は論証が中心となる。そのギャップにつまずく学生も多い。「叱られないと勉強しない。」の否定は?「勉強したら叱られた。」?そんなばかな!論理としては何処が誤っているのか?本書は、数学の用語の説明・使い方の解説に始まり、論理や証明法が述べられている。後半は高校生でも分かる内容を論理の視点から掘り下げている。本書読後は、先の誤りを正せるようになるだろう。文系学生向け。(理工学研究科・教授 長澤 壮之)



『図解でわかる!理工系のためのよい文章の書き方:論文・レポートを自力で書けるようになる方法』

福地 健太郎、園山 隆輔著 (翔泳社)2019年

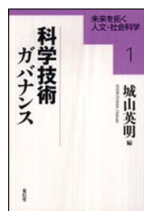
レポートや論文、報告書などの実用文を書く際には、論理的な内容にすることや、著者の考えや主張などを誤解を与えずに読者に伝えることなどが求められる。本書には、これら実用文の書き方のポイントがトピックを分けて書かれている。論理的に思考するためのポイントになるものもあり、「学ぶ」を自修するための教材としても有用である。学生のときだけでなく、指導者になったときにも役立つ本である。文系・理系両方の学生向き。(理工学研究科・准教授 杉原 儀昭)

科学技術



『ホモ・デウス:テクノロジーとサピエンスの未来』上、下
ユ瓦尔・ノア・ハラリ著 柴田裕之訳 (河出書房新社)2018年

タイトルの「ホモ・デウス」とは現在の人間(ホモ・サピエンス)をアップグレードしたものとして導入されています。そう聞くと荒唐無稽な似非科学と思われるかもしれませんが、一定の説得力のある随筆です。豊富な挿話は楽しく、読みやすい(漫画のようなスピードで読める)本です。重要なキーワードとして「共同主観」という概念が提示されます。いま特に何か宗教や主義を心底信じている人にとっては、自分を考え直す良い機会となるかもしれません。(理工学研究科・教授 山口 祥一)



『科学技術ガバナンス』(未来を拓く人文・社会科学 1)
城山英明編 (東信堂)2007年

遺伝子操作、核開発、AIなど、次々と生み出される科学技術。社会を変革するほどの影響力を秘めたそれら科学技術は、常に市民社会に効用とリスクをもたらしてきた。科学技術ガバナンスは、そうした問題に対処し、適切な評価、意思決定を行うための制度設計であり、科学技術問題に関する社会的な合意形成プロセスでもある。科学技術ガバナンス実現に向けた技術者・専門家、そして市民社会の役割とは何か、本書は具体的事例を通じて多くを示唆している。(教育学部・教授 浅田 茂裕)

外国語



『外国語を学ぶための言語学の考え方』(中公新書)
黒田龍之助著 (中央公論新社)2016年

初めて外国語を学ぶときには、「文法=調理法」と「語彙=食材」を組み合わせて勉強することが多いでしょう。でもそこに「言語学の視点」を隠し味として入れると、余分な不安(たとえば発音の「正しさ」への過剰なこだわり)が軽くなったり、「話を通じる」とはどんなことだろうかと改めて考える機会が得られたり、言葉と時間とのかかわりが言語ごとに違うことに気づけたり...というふうに、学びが「よりおいしく」なりますよ、ということを縦横無尽に語る一冊です。

(人文社会科学研究科・教授 松原 良輔)



『「国語」から旅立って』(よりみちパン!セ)
温又柔著 (新曜社)2019年

台北に生まれて3歳の時に日本に移住、台湾語、中国語、日本語の飛び交う家庭で育ち、今は日本語で創作活動を行っている作家、温又柔。日常生活のなかで、言葉から来る悔しさとうれしさを味わい、時に自分の立ち位置について悩みながらも考え、成長していく姿を、優しく、生き生きとした言葉でとらえた自叙伝です。「母語であれ外国語であれ、言葉を学ぶことにはどんな意味があるのか」を考えるためのヒントがたくさん詰まった一冊です。(人文社会科学研究科・教授 牧 陽一)

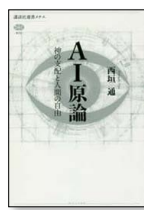
数理・情報



『カッコウはコンピュータに卵を産む』
上巻、下巻(草思社文庫)
クリフォード・ストール著、池央耿訳 (草思社)2017年

1980年代後半のコンピュータネットワーク上に起こった事件を当事者のクリフォード・ストール氏が書いた本。ドキドキする推理モノを読むように当時の、そして今に通ずる情報セキュリティについて学ぶことができる。登場する機器や技術が30年以上前のものなのでそこはちょっと読みにくいかも。

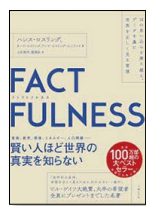
(理工学研究科・准教授 後藤 祐一)



『AI原論: 神の支配と人間の自由』(講談社選書メチエ)
西垣通著 (講談社)2018年

AIは何ができて何ができないのか。過去から現在までを俯瞰し、その背景を技術的なものにとどまらず思想的なものも含めて網羅している。AIブームの中でメディアがAIの社会的インパクトを誇大に見積もる現在、冷静な議論に必要な学際的視点を与える著書。著者との対談が<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/56489>("AIは人間を超える"なんて、本気で信じているんですか?") (2019年12月18日アクセス)にて読み、理解の参考になる。(人文社会科学研究科・准教授 高松 亮)

数理・データサイエンス



『Factfulness: 10の思い込みを乗り越え、データを基に世界を正しく見る習慣』
ハンス・ロスリング、オーラ・ロスリング、アンナ・ロスリング・ロンランド著 上杉周作、関美和訳 (日経BP社)2019年

情報の信憑性をいかに確かめるかという問題は、情報社会の進展に伴いますます難しくなっている。あらためて、我々の認識のあり方について見つめ直す必要があるとともに、今日における情報の信憑性を確かめる共通言語である科学の考え方の重要性を知る必要がある。本書は、情報の渦に巻き込まれることなく情報の信憑性を捉える上でデータの重要性と、しかしそのデータの収集の難しさについて多くの示唆を与えてくれる。

(教育学部・准教授 野村 泰朗)



『データはウソをつく: 科学的な社会調査の方法』
(ちくまプリマー新書)

谷岡一郎著 (筑摩書房)2007年

いしいひさいち氏の4コマ漫画なども載せながら日常的に接するデータや事実の捉え方を教えてくれる、文系も含めて全員に薦められる一冊。データに騙されてはいけないと言われますが、データを使わないわけにもいきません。大切なのは、データからきちんと事実を捉えて、論理的に考えるという姿勢。それを身につけるための最初の一步として役に立てくれる本です。様々な角度からデータや記述を疑い、自分の頭で考えることが大切ですので、もちろん、この書籍の記載そのものを疑って読んでみても面白いかも。(理工学研究科・准教授 大久保 潤)

グローバル・シチズンシップ



『共に生きる: 多民族・多文化社会における対話』
塩原良和著 (弘文堂)2012年

今日、外国につながるのある多様な人々が日本で暮らしている。そういった状況の中で、多文化共生ということばが叫ばれるようになった。しかし、異なる他者と共生するということはどのようなことなのかはとても難しい課題である。その課題に取り組むために、本書は、様々な理論や考え方を引用しながらわかりやすく論じられており、真の多文化共生をどのように実践したら良いのかを考える際の基盤となるものである。

(教育学部・准教授 磯田 三津子)



『選択する力: バングラデシュ人女性によるロンドンとダッカの労働市場における意思決定』

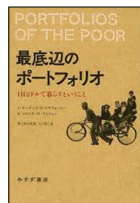
ナイラ・カビール著 遠藤環、青山和佳、韓載香訳 (ハーベスト社)2016年

国際貿易が進んだ現代のグローバル社会で起こっている女性労働の実態を、ロンドンとダッカの縫製産業におけるバングラデシュ人女性労働者の就労行動や世帯内関係の詳細な実地調査を通じて明らかにした著作。著者のナイラ・カビールは世界で最も影響力のあるジェンダー研究者の一人であり、本書も多くの欧米の大学でジェンダー研究や開発学などにおける必読書としてリーディングリストに入っている。

(人文社会科学研究科・教授 井原 基)



『国際協力: その新しい潮流』第3版(有斐閣選書)
下村村民、辻一人、稲田十一、深川由起子著 (有斐閣選書)2016年
国際協力についての基本的な頭の整理に便利です。その定義、仕組み、アプローチの変化、今世紀に入ってから新しい潮流、貧困削減、平和構築と復興、地球環境問題と持続可能な開発、途上国のオーナーシップとガバナンス、グローバル・ガバナンス、民間資本の機能、市民社会の役割、変容する国際開発戦略など。ややスタンダードな内容ですが、これらに挑戦する理論と実践が求められています。読者による批判を期待したいところ。
(国際教育研究開発センター・教授 辻一人)



『最底辺のポートフォリオ: 1日2ドルで暮らすということ』
ジョナサン・モーダック、S・ラザーフォード、D・コリンズ、O・ラトフェン著 大川修二編 (みすず書房)2011年
途上国貧困層の「工夫を凝らした賢い」生活と家計を、パングラデシュ、インド、南アフリカでの多年に亘る家計簿調査から明らかにした画期的著作。貧困層の金融生活は単純なその日暮らしで、将来に備えた計画性など無い、貧し過ぎて貯金をするのは無理、といったよくある常識が、根本的に否定されます。貧困層の側に欠陥があるのではなく、その生活・生計の態様やニーズを十分反映していない、公式な制度の側に問題があるのです。
(国際教育研究開発センター・教授 辻一人)

社会に生きる



『日本列島回復論: この国で生き続けるために』
(新潮選書)
井上岳一著 (新潮社)2019年
社会を覆う漠然とした閉塞感。国土が崩壊し、人間の居場所が失われるかもしれないという不安感。希望や夢を語ることが難しくなってしまった閉塞、不安に満ちたこの時代に、日本の「国土」と「地方」は、私たちを救ってくれるのでしょうか。「山水郷」を振り返り、今と、これからの日本について語る、新たなイノベーション、SDGsの思想にもとづく列島「回復(リカバリー)」論です。「地域創生を考える」ためのヒントが数多く盛り込まれている良書です。
(基盤教育研究センター・教授 石坂 督規)

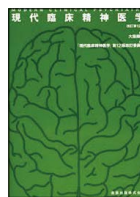


『みな、やっとの思いで坂をのぼる: 水俣病患者相談のいま』
永野三智著 (ころから)2018年
「水俣病」という名前は聴いたことがあっても、詳しいことは知らない、という方が多いのでは。この小さな本は、熊本県水俣市にあるNGOの若き事務局長として、水俣病という巨大な公害問題の患者さんたちの生活相談にのってきた著者が、そこから見てきた患者さんたちの素顔とその背後にある社会とを綴った本です。この本を読んだら、ぜひあなたも実際にいちど水俣にでかけ、著者の永野さんと話してみてください。たぶんうんとテツガクできるはず。
(教育学部・教授 安藤 聡彦)

健康科学



『ウィットゲンシュタイン: 天才の責務』1,2
レイ・モンク著 岡田雅勝訳 (みすず書房)1999年
20世紀を代表する哲学者ルートヴィヒ・ウィットゲンシュタインの詳細な伝記です。彼自身が抱えた精神障害と彼の精神障害観、精神障害に対する彼の治療的な思想・行動が、随所に記されており、人文科学的視点から精神的健康について理解を深めることができます。彼はまた、工学や教育や建築に携わったり、ケンブリッジ大学で数理哲学者ラッセルや経済学者ケインズと親交を持ったりしたことがあり、様々な学問分野に開かれている書物です。
(保健センター・教授 落合 洋士)



『現代臨床精神医学』改訂第12版
大熊輝雄原著 (金原出版)2013年
文理を問わず精神医学に関する知識を広く深く記載し、1980年の初版から数年毎に改訂され続けている教科書の労作で、医学生や研修医や精神科医のみならず、精神保健や福祉に携わる人、精神医学に一般的関心を持つ人まで、幅広い読者層を持っています。精神医学の歴史と最新の知識を踏まえ、精神的健康について特定の理論に偏らず全般的に考えるのに役立ちます。第1～5章が総論、6～11章が各論で、各論では様々な精神疾患を扱っています。(保健センター・准教授 近江 翼)

スポーツ



『脳を鍛えるには運動しかない! : 最新科学でわかった脳細胞の増やし方』
ジョン・J・レイティ、エリック・ヘイガーマン著 野中香方子訳 (NHK出版)2009年
ハーバード大学医学部臨床精神医学部准教授のジョン・J・レイティ氏(医学博士)の著作で、米国イリノイ州ネーパヴァール学区の高校体育教師が、独自の体育プログラムの実践を通して生徒の学力を向上させたこと、運動をすることにより脳内の神経化学物質が増えたりバランスが良くなることで、うつ病やADHDを改善することなど、運動のメリットを幅広く科学的研究成果や事例をもとにわかりやすく紹介している。
(教育学部・教授 有川 秀之)



『身体感覚を取り戻す: 腰・ハラ文化の再生』
(NHKブックス)
斎藤孝著 (日本放送出版協会)2000年
日本人がかつて持っていた腰・ハラに注目した身体文化について再評価している。この伝統的な身体文化は、明治以降日本人が重んじてきた西洋的な発想の合理主義とは、一線を画すものであり、私たちが伝統として持っていた文化に思いを馳せると共に、そこから、現代の日本人に必要な身体感覚にヒントを与えてくれるものである。特に、スポーツを実践している人には、自分の身体について考えるきっかけを与えてくれると考える。
(教育学部・准教授 松本 真)



埼玉大学図書館では、「埼玉大生に読んでほしい教養図書」の開架を設けています。
このリーフレットやホームページで紹介されている図書は全て借りることができます。
埼玉大学教育企画室のホームページに、各分野からのすべての推薦図書を掲載した完全版を掲載しています。
こちらを併せてご覧ください。

<http://park.saitama-u.ac.jp/~zengaku/books>

